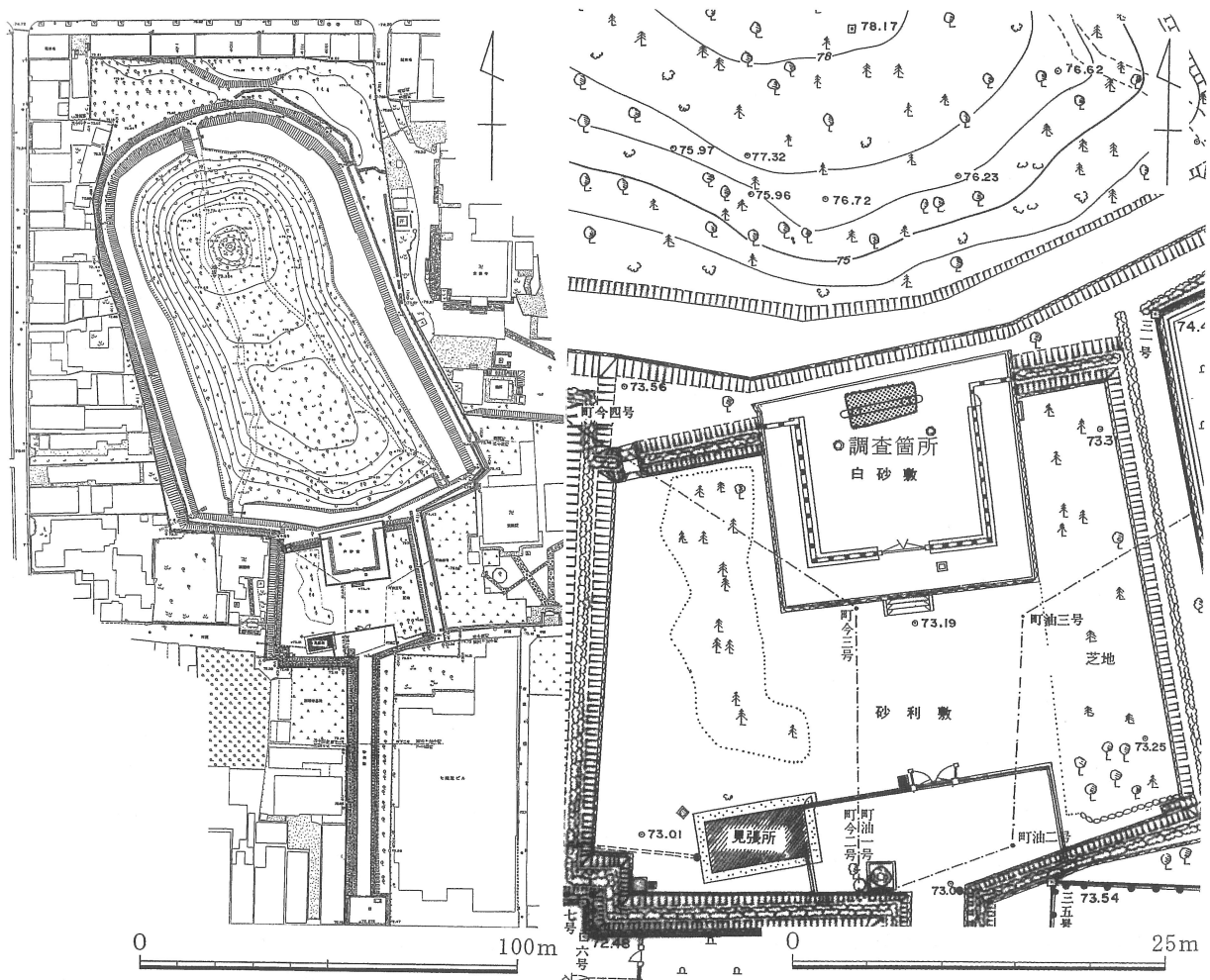


開化天皇 春日率川坂上陵鳥居改築工事に伴う立会調査

はじめに

開化天皇春日率川坂上陵は、JR 関西本線（JR 大和路線）奈良駅の北西へおよそ 0.5km、奈良県奈良市油阪町に所在しており、その立地は春日山から西に延びる台地の縁辺にあたる。墳塋は墳丘主軸を北北西－南南東方向に取る前方後円形で、現状では、墳長およそ 110 m、後円部径およそ 50 m、前方部幅およそ 30 m、同長およそ 60 mを測る（第 33 図）。しかし、段築が認められないこと、くびれ部の幅が広く後円部と前方部の境が不明瞭であること、後円部から前方部にかけての墳頂平坦面がほぼ同一平面となっていて後円部中央に高さおよそ 3 mの円丘が所在すること、前方部南西側隅角が削り取られているような形状となっていることなど、その姿は大きく改変されているものと思われる。幕末の修陵以前の姿を描いた古絵図によれば、現在の墳塋部分は東側に隣接する念仏寺の墓地や畑として利用されており⁽¹⁾、そのため本陵を「念仏寺山古墳」と呼ぶこともある⁽²⁾。また同絵図によれば、現在拝所や奈良部事務所のある敷地の西半部は西側に所在する西照寺の東照宮や墓地、東半部は東側の霊巖寺の墓地であったことが知られる。なお、本陵の所在地は平城京の左京三条六坊四坪にあたり、近世の「奈良町」の範囲にも含まれる。

本陵における調査事例としては、昭和 50 年の鳥居建替工事に伴う立会調査⁽³⁾、昭和 51 年の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所における事前調査⁽⁴⁾、昭和 63 年の透塼控柱改修工事に伴う立会調査⁽⁵⁾、平成 14 年の進入路設置その他工事に伴う立会調査⁽⁶⁾、などがある。特に昭和 50 年の調査では前述の絵図



第33図 春日率川坂上陵 地形図 (1/2000) および調査箇所位置図 (1/500)

の示すとおり、江戸時代の墓地に伴う木棺、蔵骨器などが発見されている（以下、昭和50年に行われた工事および調査を「前回工事」・「前回調査」と呼称する）。

今回の工事は、前回工事で建て替えた木造鳥居が老朽化のために改築されることになったもので、これを機に鳥居は材質が木造から石造へ、大きさが柱間10尺から9尺へと変更された。当初は鳥居の基礎部分2箇所について掘削を行う予定であったが、旧鳥居の基礎撤去および新鳥居用基礎の設置に必要とされる作業スペースについて、旧基礎の周囲を一回り大きく掘削した場合には前回調査で確認されたものと同様の遺構が検出されるであろうと予想されたこと、鳥居の規格変更によって基礎の位置が中心寄りに変更になること、前回調査で中間部分は既に掘削済みとの認識であったこと、などの理由により、2箇所の基礎掘方を連結することで確保することにし、他の3方は必要最低限のみの掘削とした。その結果、掘削範囲は、長さおよそ4.8m×幅およそ2.5m×深さおよそ1.7mとなった（第34図）。工期は平成20年11月11日～平成21年3月6日で、うち、掘削などの作業が実際に行われた平成20年12月8日～平成21年2月16日の期間中は適宜現地職員が立ち会い、特に平成20年12月8～12日、平成21年1月13日～18日には本部職員も参加しての調査を行った。なお、本部職員立会期間中の12月11日には歴史学・考古学関係16学・協会の代表者に現地を公開した。また、奈良県教育委員会宮原晋一氏、川上洋一氏、奈良市教育委員会森下浩行氏、三好美穂氏、久保邦江氏、松浦五輪美氏には現地にご足労いただき、数々の有益なご助言を賜った。記して謝意を表します。

掘削箇所の状況

（1）土層

今回の掘削箇所での土層はその性格から大きく3層に大別できる（第34図）。Ⅰ層は、拝所造成以降現在に至るまでの整備の過程で形成された土層を一括したもので、地表に敷き詰められた白砂層、前回調査・工事箇所の埋め戻し土、それ以前の鳥居の工事に伴って掘削された箇所の埋土と思われる土層、拝所造成時の盛土層、などからなる。Ⅱ層は拝所造成以前に墓地であったところに形成された土層で、旧表土と墓地造成土に分かたれる。Ⅲ層は墓地として利用される以前に形成されたと思われる土層となる。Ⅲ層には土器片が含まれており、今回の掘削深度では地山層には到達していない。

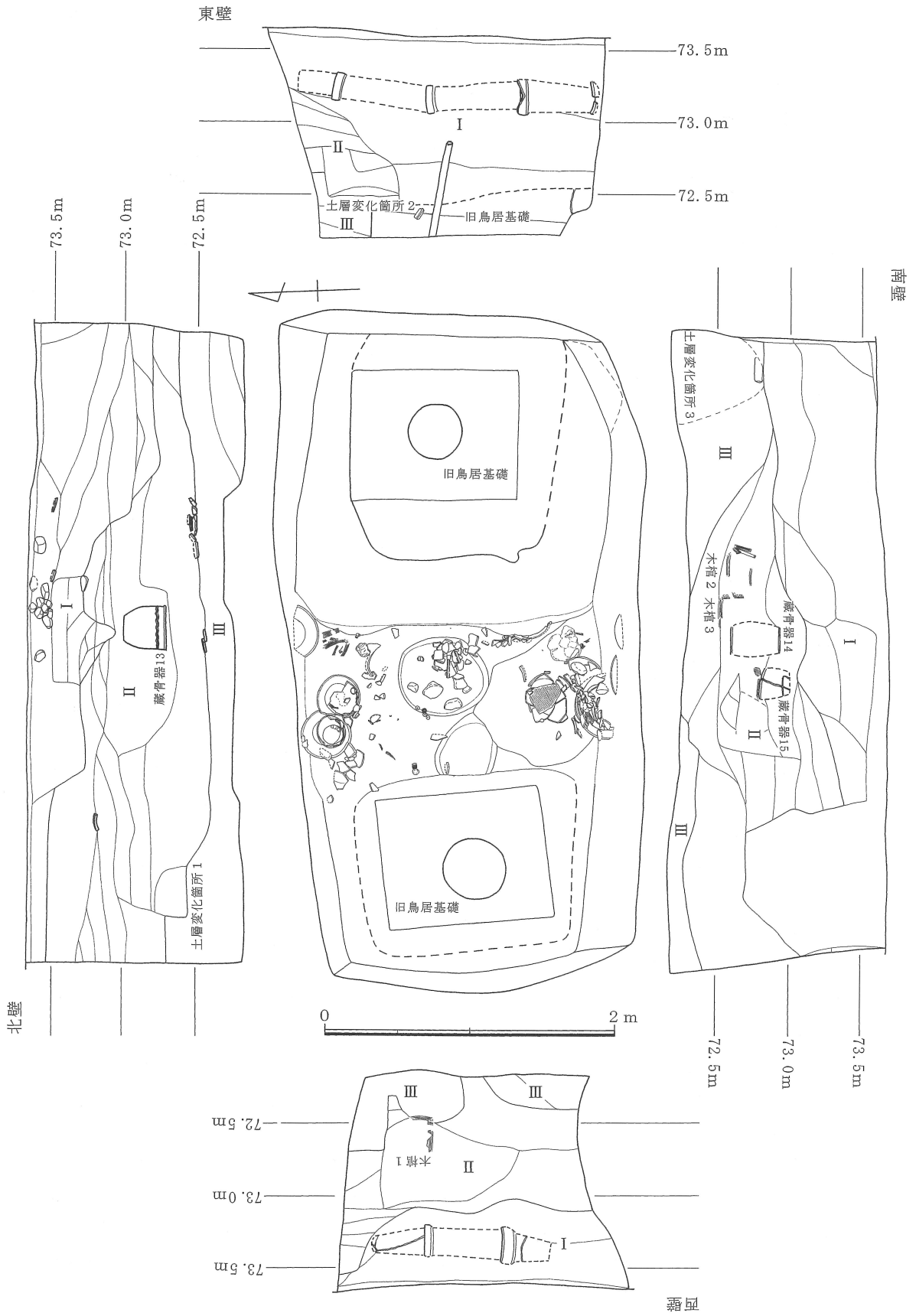
Ⅱ層最上層となる暗茶褐色の土層については、調査途中までは墓に伴う土饅頭と理解しており、16学・協会代表者への公開時にもそのように説明を行った。しかし、その後旧基礎の撤去によってその背後の土層の状況も観察可能となった結果、旧表土ではあっても土饅頭状とはならないことが明らかになった。土饅頭説については撤回したい。

掘削箇所の土層の状況からは、最下層の灰色粘質土層の上を土や礫で造成し、墳塋側に墓地を拡張していった状況を窺うことができる。最下層となる粘質土層の存在からは墓地形成以前に何らかの窪地が存在していたともと思われるが、この土層と同一のもと思われる土層は昭和51年度に実施された西側外堤の調査でも確認されている。現在の周濠よりも広い範囲で墳塋を巡る窪地が存在していたこととなり、当陵の旧状を考える上で興味深い。

（2）遺構

今回の掘削では両基礎の中間部分を中心に江戸時代の墓地に関わる遺構が多数検出された。遺構は現在の拝所地表面下0.6～1.7m付近に分布しており、前回調査範囲の下層や外側に存在していたものである。現地で確認しえた遺構は、蔵骨器⁽⁷⁾13基、木棺3基、木棺の痕跡と思われる人骨出土箇所2、埋葬施設の痕跡と思われる壁面での土層変化箇所3、磁器や銅銭など副葬品のみが残されていた遺物群2箇所、落ち込み3箇所、などである（第34～36図、図版18～20-1～6）。

各遺構に対してはその種類毎に認識した順に通し番号を振っていったが、蔵骨器の6と9については番号割り振り後に大振りの土器片が遊離しているものと確認できたために欠番となっている。また、遺物整理が未了のため、蔵骨器本体を含め遺物の所見は暫定的なものであることをお断りしておく。



第34図 春日率川坂上陵 調査箇所平面図および断面図 (1/40)

蔵骨器 蔵骨器1は北壁寄りで確認したもので、瓦質の甕を倒置したものである。甕は底部から胴部にかけての一部を欠失していたが概形を留めていた。内部にはミニチュアの茶碗と思われる磁器が副葬されており、両脚を揃えた状態と思われる人骨を確認できた(第36図1、図版18-3、19-1・3・5)。

蔵骨器2は掘削箇所中央付近に瓦質の土器片が集中していた箇所を認定したもので、最下部に底部片が認められたことから、本来は正置状態であったものと思われる。破片取り上げ中に付近から六道銭として副葬されたとと思われる銅銭が2組分出土しており(6枚と3枚)、2基以上の蔵骨器の破片が混在している可能性もある(図版18-4)。

蔵骨器3は南壁寄りで確認した正置状態の瓦質の土器で、口縁部付近は欠失している模様である。内部で板材を検出しており、蓋に使用されていたものが落ち込んだものと思われる。板材の下では漆皮膜を確認できたが、木地が腐朽していたため器形は不明である。また、蓋の下からではないが銅銭3枚が出土しており、六道銭として副葬されたものである可能性が高い(図版18-4~6)。

蔵骨器4は瓦質土器を倒置していたもので、今回の掘削で一部を破壊してしまったようだが、周囲の破片の少なからずそれ以前にも破壊を受けていたものと思われる。原位置を留めていたのは口縁部のごく一部のみであった(図版18-4)。

蔵骨器5は蔵骨器4の北側に並んで検出したもので、こちらも瓦質土器を倒置していた。蔵骨器4と同様に今回までの掘削によって破壊されており、遺存していたのは口縁部付近の一部である。内部には奇跡的に銅銭2枚が遺存していた。蔵骨器4とは切り合っており、その状況から、先に埋納されていた蔵骨器5が、蔵骨器4の埋納により一部破壊されたものと思われる(図版18-4)。

蔵骨器7は蔵骨器3のすぐ南側で南壁にめり込む形で検出した。瓦質の甕を倒置したもので、内部で漆の皮膜を確認したほか、歯や小さな粒状の有機質が複数認められた。粒状有機質は数珠の可能性があるとと思われる。また、口縁の下には底板と思われる木質が遺存していた(第36図2、図版18-5・7・8)。

蔵骨器8は北壁寄りで確認したもので、明赤褐色の胎土で、外面に暗褐色の釉薬がかけられた陶器である。焼成不良のため精査のため周囲の土を除去すると胎土が土に付着して壊れていくような状況で、結局取り上げることができなかった。このような状況であったため、当初は胎土部分を粘質土と誤認し、木棺の痕跡と考えていた。埋納は倒置状態であったと思われる(図版18-3)。

蔵骨器10は蔵骨器1の西側に接していた正置状態の瓦質の甕で、内部に赤漆の皮膜、六道銭が認められた。漆製品の原形は腐朽のため不明である。蔵骨器1側の口縁部が欠損しており、その一部と思われる破片が蔵骨器1のすぐ横で出土していることから、蔵骨器1の設置により破壊されたものと思われる(第36図1、図版18-3、19-1・3・6・7)。

蔵骨器11は瓦質の甕を倒置していたもので、蔵骨器3・7に近接し、口縁部から胴部にかけての一部しか遺存していなかった。その遺存状況から蔵骨器7の設置により大きく破壊されたものと思われる。内部から鉄製品が出土しているが、何であるのかは明らかでない(図版18-7)。

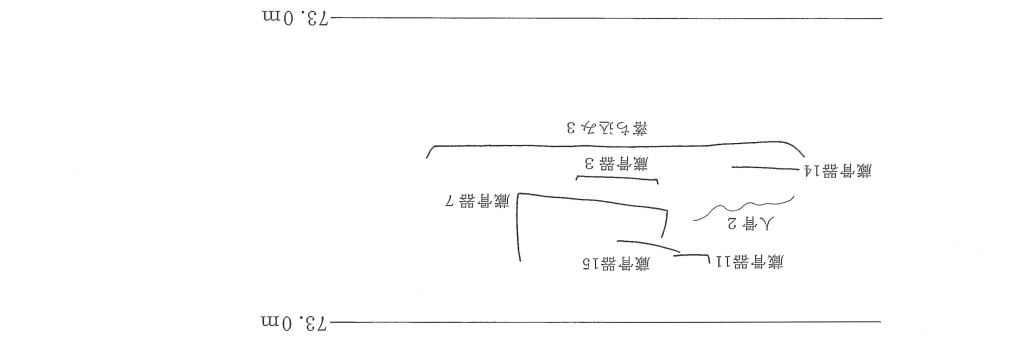
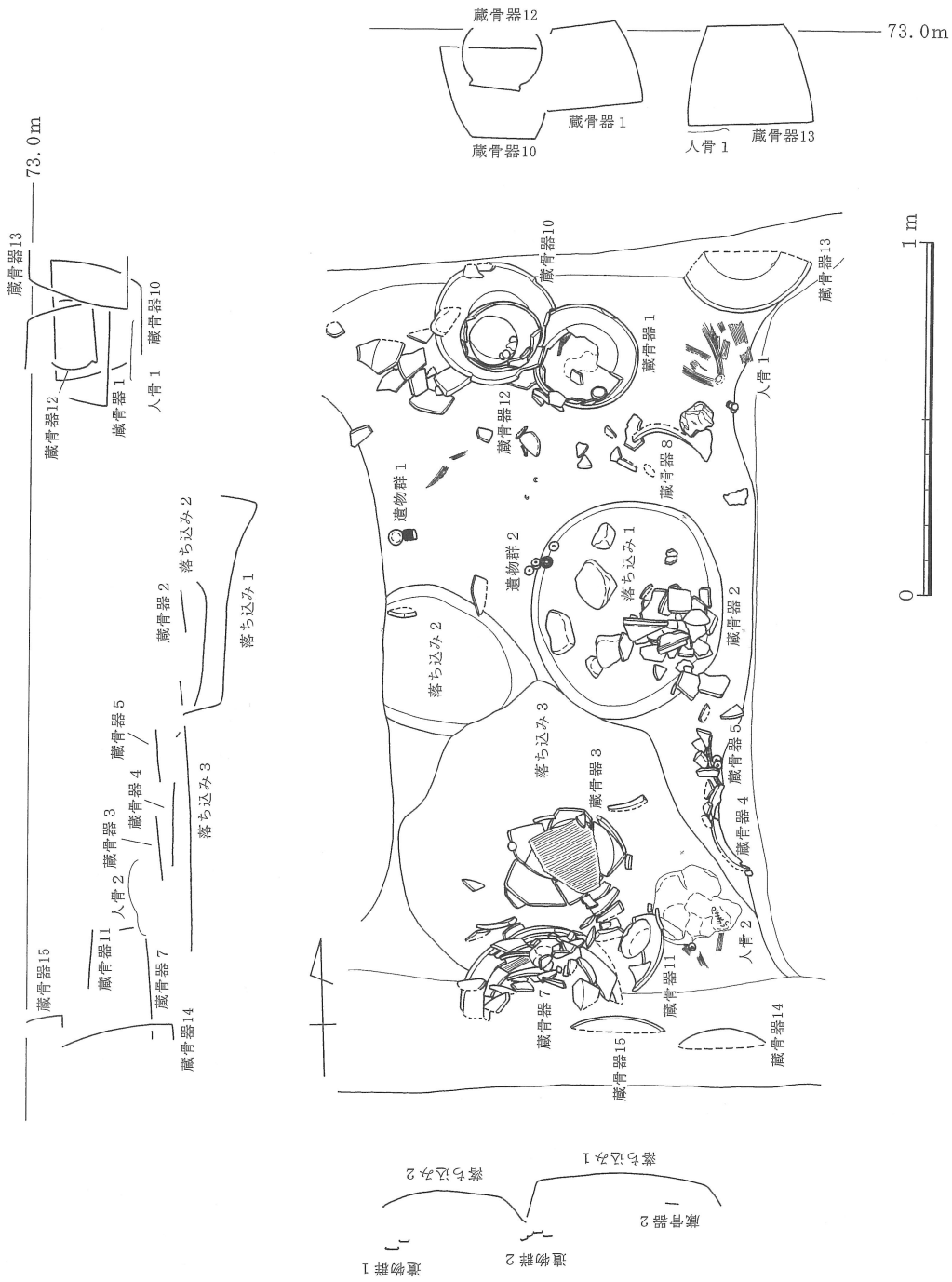
蔵骨器12は陶器の壺を倒置したもので、良好に遺存していた胴部から口縁部にかけてが蔵骨器10の内部にすっぽり収まるように埋納されていたが、組み合ったものであったと考えるには不自然な状況であり、時間差を伴う埋納行為によるものと思われる(図版18-1・3・6)。

蔵骨器13は倒置された瓦質の甕で、北壁に半分強がめり込んだ状態で検出した。工事に影響がない位置であったため、取り上げずに現状のまま保存とした(図版19-1)。

蔵骨器14・15はいずれも倒置状態の瓦質の甕で、降雨によって南壁の一部が崩壊して露出したものである。蔵骨器15は口縁部下に木質を確認できたので底板が遺存しているものと思われる。14・15とも工事で破壊される恐れのない位置であったため、現状保存とした(図版20-2)。

木棺 木材の遺存状況から木棺の部材と推定されたものについて認定した。いずれも壁面に一部が露出したものであり、工事に支障がないため現状保存とした。

木棺1は西壁で桶棺の壁体材と思われる木質を確認したもので、その位置から、前回調査の報告で西壁断



第35図 春日率川坂上陵 遺構平面図および垂直分布図 (1/20)

面図に表現されているものと同じものと思われる。

木棺 2 は南壁で桶棺の底と壁にあたると思われる木材の一部を確認した。人骨と思われるものも露出していた。

木棺 3 は、木棺墓 2 に近接して確認した桶棺のものと思われる木材で、その位置関係から棺の東側上半部は蔵骨器 14 の設置によって破壊されているものと思われる。

人骨 人骨については、ある程度形状を保ち原位置のままと認定した 2 箇所について番号を振った。それら以外にも腐食した人骨と思われる暗茶褐色の有機質は掘削箇所内のいたるところで見受けることができた。

人骨 1 は蔵骨器 8 と蔵骨器 13 の間で確認した。蔵骨器を伴っていないことは確実で、本来は木棺墓であったものと思われる。近接して銅銭を検出しており、人骨 1 に伴う六道銭であった可能性がある（図版 19-1・4）。

人骨 2 は蔵骨器 11 のすぐ東側で検出したもので、横倒しとなった頭蓋骨の形状を確認できた。こちらも蔵骨器はなく、木棺墓であったものと思われる。頭蓋骨の額に接するように銅銭を検出しており、六道銭が副葬されていたものと思われる（図版 19-8）。

土層変化箇所 北壁・東壁・南壁でそれぞれ 1 箇所ずつ、埋葬施設の痕跡と思われる土層の変化を確認した。

土層変化箇所 1 は北壁西端付近で認められたもので、土層が L 字状に変化していた。木棺の痕跡、あるいは蔵骨器を引き抜いた痕跡と思われる。

土層変化箇所 2 は東壁で認められた L 字形の土層の変化で、その位置から、前回調査で取り上げられた「蔵骨器 10」の痕跡と思われる。

土層変化箇所 3 は南壁東端付近で壁面下部が崩落した部分を認定したもので、その形状から平面形が円形となる空間の存在が推定される。桶棺が存在する可能性が高い。掘削部分に流れ込んだ土砂は除去したが、それ以外の部分については工事への影響がないため、現状のまま手をつけずにいた。

遺物群 遺物群としたものは本来は副葬品であったと思われる遺物のみを検出したものである。工事など過去に何らかの理由で撤去された蔵骨器に伴っていたものの取りこぼしかと思われるが、蔵骨器ではなく木棺であった可能性も否定はできない。

遺物群 1 は、磁器、土鈴、銅銭からなる。磁器はミニチュアの茶碗と思われ、その中に半裁状態の土鈴がはまっていた。銅銭は 3 枚、2 枚、1 枚の 3 塊に分かれていたが、枚数は 6 枚となり、元は 1 セットであったものと思われる。

遺物群 2 は、磁器、銅銭からなり、こちらの磁器は蔵骨器 1 や遺物群 1 のものに比べて大きく、猪口あるいは湯飲みである可能性もある。銅銭は 6 枚が 1 塊となっていた。

落ち込み 蔵骨器などの検出により掘削を停止した床面に土色の変化が認められたことから 3 箇所の落ち込みを認定した。いずれの落ち込みの埋土から土器片が出土しているが、小片ばかりで器形を復元できるようなものは含まれていないため、落ち込みに直接伴うものではないと思われる（図版 20-4）。

落ち込み 1 は平面形がややいびつな円形で、その形状から桶棺埋納のための掘方であった可能性が高いと思われる。その位置は蔵骨器 2 の直下にあたる。

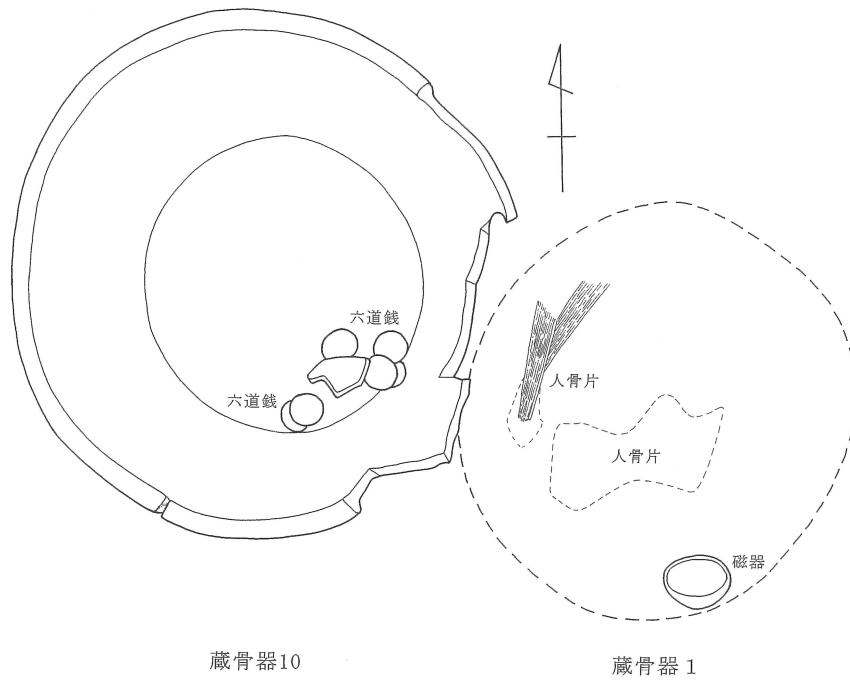
落ち込み 2 は、落ち込み 1 の西側で認められ、平面形は楕円形に近いいびつな円形。落ち込み 2 と同様に桶棺の掘方と思われる。

落ち込み 3 は、落ち込み 1・2 の南側に広がっており、検出面での平面形は不整形。埋土と同一の土層は壁面にも続いており、単なる落ち込みではなく、繰り返し行われた埋葬によって幾度となく掘り返された部分に相当するようである。

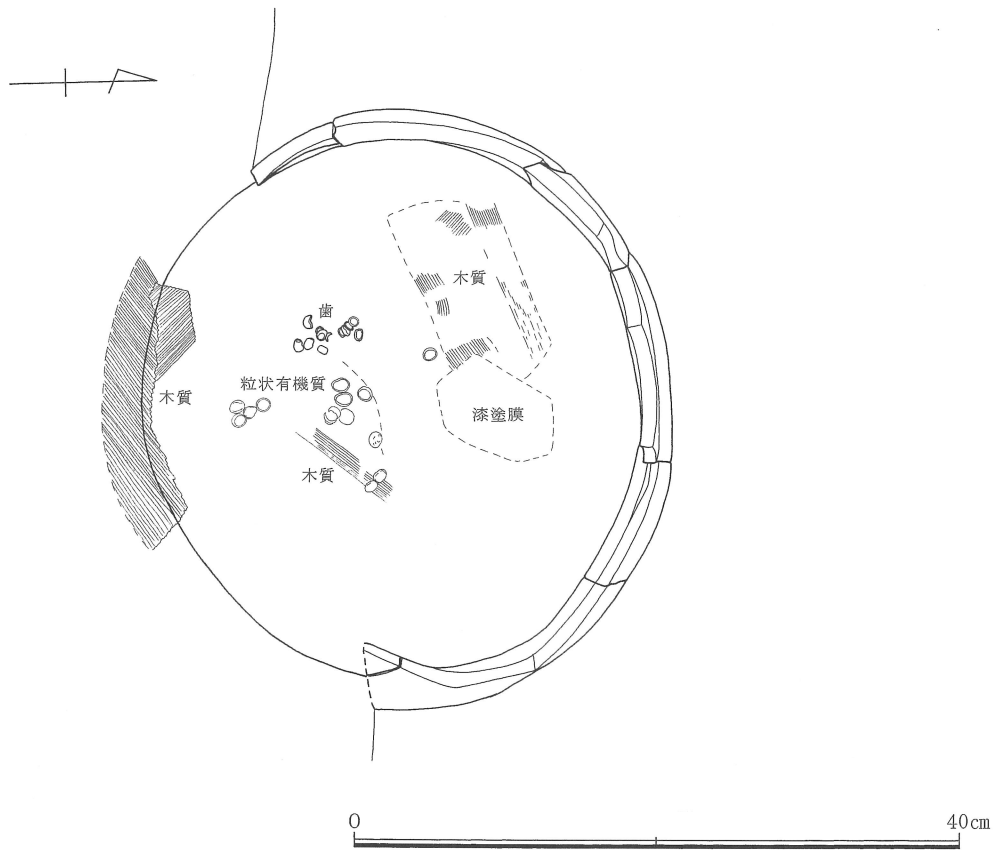
（3）出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総数は 1,600 点を超える。遺構に伴って出土した蔵骨器本体の破片や副葬品などのほかに、造成土に包含されるなど、遺構に伴わない遺物も数多く出土している。そうしたもののうち

1 蔵骨器 1・蔵骨器10



2 蔵骨器7



第36図 春日率川坂上陵 遺構詳細平面図 (1/5)

は、埴輪片、石鍋片、羽釜片、土師皿など、当地の形成過程を理解する上で注目すべきものがあるが、詳細については他日を期したい。

おわりに

前回・今回とも蔵骨器には正置のものと倒置のものが認められ、倒置のものが多数を占めているようである。両者の検出状況や遺物に差異は認められず、置き方の違いが何に由来するのかは明らかでない。倒置されていた蔵骨器 1 内部に副葬されていた磁器が正置状態であったため、あらかじめ倒置されることを念頭に置いて土器内に納めたものと思われるが、掘方内に遺骨もしくは遺骸、副葬品などを安置してから土器をかぶせている可能性もある。

前回調査で確認された分をあわせると、当地の埋葬施設は非常に高密度で存在していたことになる。前回調査の報告では、検出した蔵骨器の大部分について「最初の鳥居建設の際出土した蔵骨器を取集めて埋納した可能性が高い」との所見が述べられているが、倒置状態のものでも内容物が保たれており、原位置を動かされているものとは思われない。土層の状況からも、非常に狭い場所で繰り返し繰り返し埋葬行為が行われた結果の集積と考えるべきであろう。

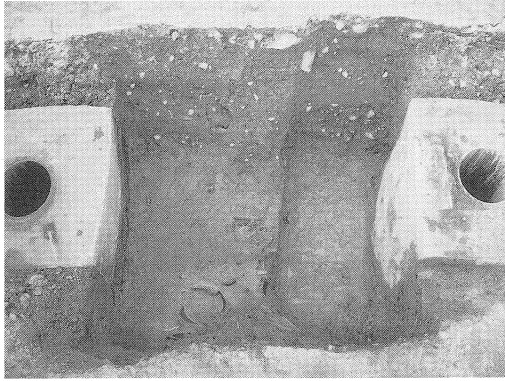
調査の進展によって得られた知見により、12月11日に実施した歴史学・考古学関係 16 学・協会代表者への現地公開時での説明内容とは見解を変更した部分がある。遺物の分析が未了のため、最終的な報告にはできなかったが、本稿を現時点での中間報告と理解していただきたい。

今回検出した遺構については本来的に本陵に伴うものではないため、工事に支障がある部分については記録保存のうえ撤去し、工事は予定通りに施工された。(有馬 伸)

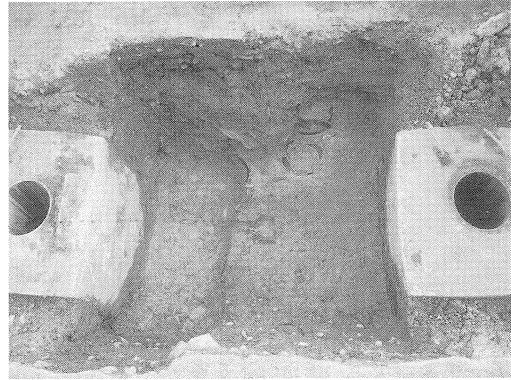
註

- (1) 石田茂輔「開化天皇陵鳥居建替工事の立会調査」『書陵部紀要』第 28 号、1977 年。
- (2) 本陵の呼称については、「念仏寺山古墳」のほか、江戸時代に「坂上山（さかのえやま）」、「弘法山」と呼ばれていたことから「坂ノ上山（さかのうえやま）古墳」、「坂上山（さかがみやま）古墳」、「弘法山古墳」とするものもあり、さらには所在地の小字名から「山ノ寺古墳」との呼称も提唱されている。

松村隆文「念仏寺山古墳（伝開化天皇陵古墳）」近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社、1991 年。
中島和彦「開化天皇陵」『「天皇陵」総覧』（『歴史読本特別増刊・事典シリーズ』第 19 号）、新人物往来社、1993 年。
今尾文昭「天皇陵古墳解説」森浩一編『天皇陵古墳』、大巧社、1996 年。
伊達宗泰「開化陵（念仏寺山・坂ノ上山・弘法山古墳）は前方後円墳なのだろうか」『古代学研究』第 150 号、古代学研究会、2000 年。
鐘方正樹「坂上山古墳 [開化天皇春日率川坂上陵]」清水眞一・泉武・岡林孝作編『大和前方後円墳集成』（『橿原考古学研究所成果』第 4 冊）、奈良県立橿原考古学研究所、2001 年。
西崎卓哉「開化天皇陵古墳」大塚初重・小林三郎『続日本古墳大辞典』、東京堂出版、2002 年。
- (3) 石田茂輔「開化天皇陵鳥居建替工事の立会調査」、前掲註（1）。
- (4) 石田茂輔「開化天皇陵の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所の調査」『書陵部紀要』第 29 号、1978 年。
- (5) 飯倉晴武「昭和 63 年度 陵墓関係調査概要」『書陵部紀要』第 41 号、1990 年。
- (6) 清喜裕二「開化天皇 春日率川坂上陵進入路設置その他工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第 55 号、2004 年。
- (7) 今回検出した土器については、後述のように土器内部で検出した人骨が脚を折り曲げた状態を保っているように観察されるものがあつたこと、複数の土器内から出土した歯がいずれも成人のものとは考え難い小ささであること、など、小児を埋葬するための土器棺として用いられていた可能性が高いものもあり、全てを蔵骨器と断定できるわけではないが、本稿では蔵骨器として記述する。



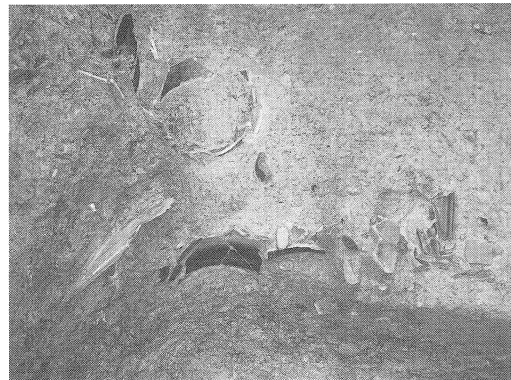
1 春日率川坂上陵
遺構検出状況（南から）



2 春日率川坂上陵
遺構検出状況（北から）



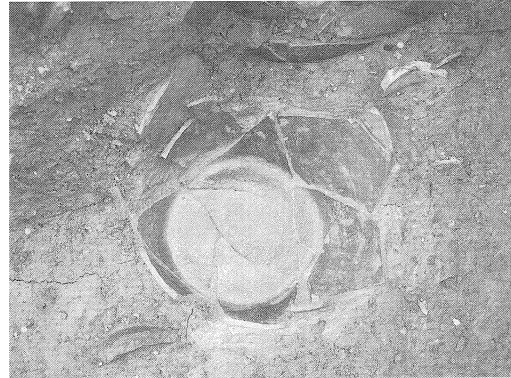
3 春日率川坂上陵
蔵骨器1・8・10（南西から）



4 春日率川坂上陵
蔵骨器2～5（東から）



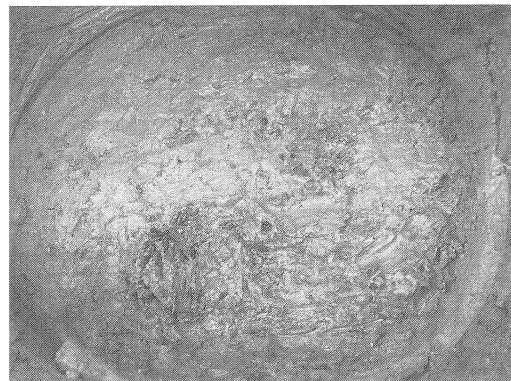
5 春日率川坂上陵
蔵骨器3・7（北西から）



6 春日率川坂上陵
蔵骨器3内部（北から）



7 春日率川坂上陵
蔵骨器7・11（北西から）



8 春日率川坂上陵
蔵骨器7内部（北から）



1 春日率川坂上陵
蔵骨器 1・10・12・13, 人骨 1 (南東から)



2 春日率川坂上陵 北壁下部



3 春日率川坂上陵
蔵骨器 1・10・12 (南から)



4 春日率川坂上陵
人骨 1 (南東から)



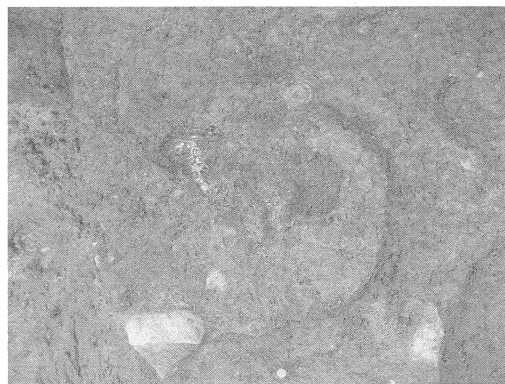
5 春日率川坂上陵
蔵骨器 1 内部 (南西から)



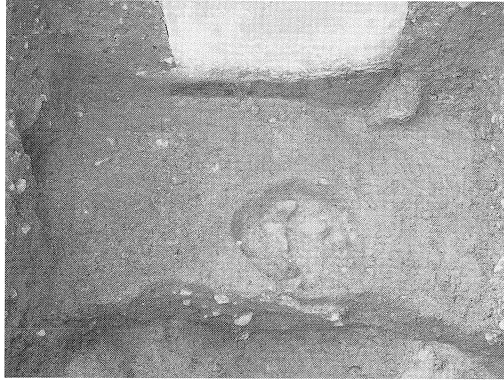
6 春日率川坂上陵
蔵骨器 10・12 (東から)



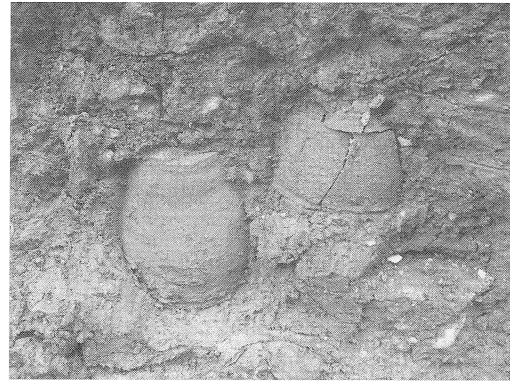
7 春日率川坂上陵
蔵骨器 10 内部 (南から)



8 春日率川坂上陵
人骨 2 (北から)



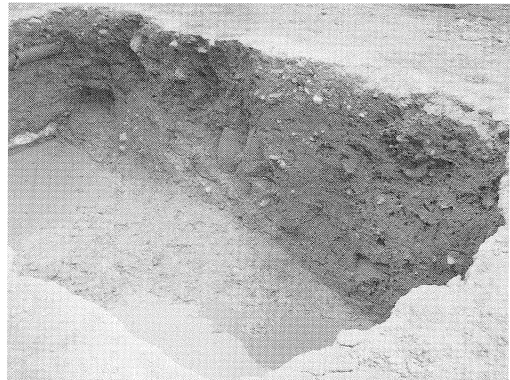
1 春日率川坂上陵
落ち込み1～3 (東から)



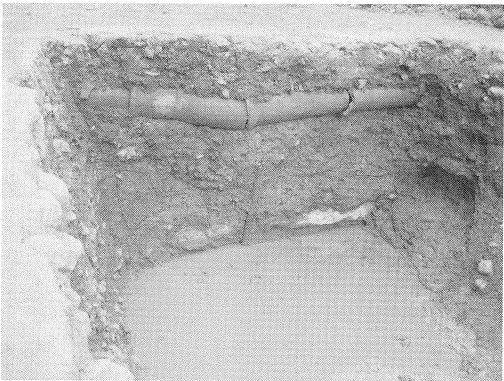
2 春日率川坂上陵
遺蔵骨器14・15 (北から)



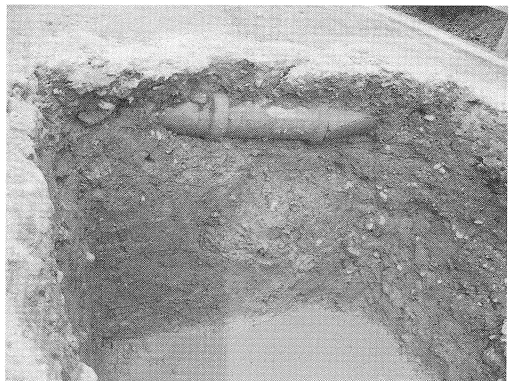
3 春日率川坂上陵
掘削箇所完掘後 北壁



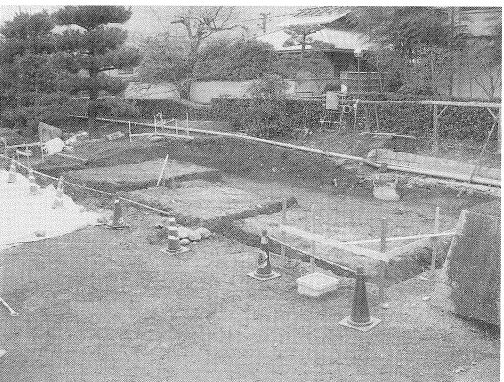
4 春日率川坂上陵
掘削箇所完掘後 南壁



5 春日率川坂上陵
掘削箇所完掘後 東壁



6 春日率川坂上陵
掘削箇所完掘後 西壁



7 嵯峨東陵 部事務所基礎掘削箇所
全景 (北東から)



8 嵯峨東陵 部事務所基礎掘削箇所
北壁流路跡